

# 農山漁村でゆとりとやすらぎを

## ～「オーライ！ニッポン」北海道シンポジウム～ くればいいっしょ！！北の大地へ

近年、豊かな自然に満ちあふれ、温かい人情の息づく農山漁村にゆとりとやすらぎを求めて、さまざまな形で行き交う人々が増えています。一方、農山漁村においても、都市から来る人々と交流することで、いきがいや誇りを持つとともに、農業・農村に対する理解の促進や地域の活性化などが図られている地域も出てきています。このような都市と農山漁村の共生・対流の取り組みを広げていくため、昨年6月に全国で371団体が参加し、「都市と農山漁村の共生・対流推進会議（通称オーライ！ニッポン会議）」が発足し、都市と農山漁村双方の生活・文化を楽しむ活動を普及するキャンペーンを各団体の活動を通じ展開しているところです。

この一環として、オーライ！ニッポン会議が主催し、北海道、北海道開発局、農林水産省、都市農山漁村交流活性化機構が共催する「オーライ！ニッポン」北海道シンポジウムが平成16年9月10日（金）に、一般市民・農業関係者など700名が参加し、札幌市で開催されました。



### オーライ！ニッポン会議とは

#### 新たなライフスタイルを目指して

オーライ！ニッポン会議では、農林漁業体験や田舎暮らしなどの都市と農山漁村を行き交う新たなライフスタイルを広め、都市と農山漁村それぞれに住む皆さんがお互いの地域の魅力を分かち合い、「人・もの・情報」の行き来を活発にした新しい日本再生を目指します。

また、この新しいライフスタイルを求める動きを国民的な運動に盛り上げていくために、キャンペーン名「オーライ！ニッポン」を用いて、広く皆様に呼びかけていきます。

代表 **養老 孟司**

東京大学名誉教授  
北里大学教授



シンポジウムは、主催者を代表して金田英行農林水産副大臣（当時）、麻田信二北海道副知事、吉田義一北海道開発局長、来賓として武部勤衆議院議員各氏からの挨拶、木村尚三郎東京大学名誉教授による基調講演、斉藤外一由仁町長ら5人によるパネルディスカッションという構成で行われ、最後に、北海道における都市と農山漁村の共生・対流の促進を宣言とシンポジウムの終了後、都市と農山漁村交流実行委員会による「手づくり交流会」が開かれました。

## 基調講演

「21世紀の幸せはどこに—グローバルよさようならローカルよこんにちは—」

基調講演では、「オーライ！ニッポン会議」顧問、食と農の応援団団長、静岡文化芸術大学学長、2005年日本国際博覧会総合プロデューサーなど要職を兼任され、わが国の社会文明論の第一人者として活躍されている木村尚三郎氏が、「21世紀の幸せはどこに」をテーマに、ご自身の体験談なども交えて、21世紀における幸せのあり方についてお話しされました。

「20世紀という時代は、昨日より今日が良く、今日より明日が良いという時代。現在は、全身に大きな驚き、喜び、幸せを与えてくれるような技術、工業製品がゼロとなり、昨日は今日の続き、明日は今日の続きという当たり前の時代。20世紀という異常な時代から当たり前の時代に戻り、当たり前の常識が再び大事になってきた」

「大都会へ出ていってお金を稼いでも幸せにはなれない状態。先がどうなるかわからないのでどっちの方向に行けば本当の幸せがあるのか誰も教えてくれない時代。こういう時代は“安心”が重要」

「先祖の知恵とか体験を生かす。すなわち先祖と共に生きる。あるいは人が人を愛する。人が自然と共にお互い愛する。お互い元気づけられて生きていく。このような愛と共生の中に大きな安心、大きな幸せを実感することができる。今の時代はこういった当たり前のことが必要」



基調講演者

木村尚三郎 (きむらしょうざぶろう)  
東京大学名誉教授・(社)国土緑化推進機構理事長

1930年生まれ。東京都出身。東京大学文学部卒業後、日本女子大学文学部助教授、東京都立大学法学部助教授、東京大学教養学部教授を経て、'90年同大学名誉教授。現在、(社)国土緑化推進機構理事長、静岡文化芸術大学学長、'05年日本国際博覧会総合プロデューサー、財務省関税・外国為替等審議会会長、棚田学会会長等を兼務。西洋中世史を中心に、社会史、文明論など幅広く活躍し、卓抜な社会・文明批判を展開されている。

「その土地に暮らして命の知恵と楽しさを求めて旅をしている」

「今の時代、多くの人が実感のある幸せを求めて旅をしている。その土地なりの暮らしと命の知恵と楽しさを求めて旅をしている」

「その土地に住んでいる人にとっても良いと同時に外からやってくる人にとっても良い、そのような“住んでよし、訪れてよしの土地づくり”が重要」

「北海道は食料生産

基地といわれるが、単なるものを作っているのではないはず、私たちの食べるものは体と心を養う命の糧であり、まさに命の基地が北海道である。これほど誇り高く自信に満ちた表現はない」

「命あふれた安心の大地こそ北海道の未来であり、まさに全世界的なグローバルな生き方が広まれば広まるほどローカルな土地ごとの命あふれた生き方というのがこれからの幸せの根拠をなす。北海道ほど適した土地は他にないと思う」と北海道へのエールをいただきました。

## パネルディスカッション

「素晴らしい素材を温かいところでおもてなし」



北海道新聞社常務取締役の渡辺藤男氏をコーディネーターに、パネリスト4名による地域の食材やもてなしの心をテーマにパネルディスカッションが行われました。

各パネラーからは、食と農を通じて人の交流が深まった取り組み事例として、農業体験を通じて大人や子供に学習の場が提供されたこと、さらには、都会の人に地元農産物や水産物を食べてもらうことで農山漁村の持つ魅力を都会に住む多くの人に伝えられたことなどが紹介され、実践者としての独自の視点から、都市と農村の交流のあり方、北海道の素材をどのように活用して行くべきかなどについて、活発な議論が交わされました。

山川 自然と共にある、命と共にある暮らしができる、それが農業だと全身で感じ、自分の生き方ですと伝えている。いろいろな人たちとの出会いのなかで、経営の一環として都市と農村の交流が根付いてきた。農業や食料のことは全て農業者の問題だととらえてきたが、食べてくれる人の理解なしに大好きな農業は続けられない。また、都会の人も畑に来て、野菜を見て、体験して農業を



パネリスト

**斉藤 外一** (さいとう といち)  
北海道由仁町長

1934年生まれ。'91年より由仁町長。'00年札幌大学大学院非常勤講師、'03年オーライ！ニッポン会議運営委員に在職。'95年度まちづくりと連動した産業振興方策として「ハーブのあるまちづくり事業」を策定。'01年度日本最大級のハーブガーデン「ゆにガーデン」を開園。さらには優良田園住宅地の造成により農的暮らしの推進などにより全国から注目を浴びている。



パネリスト

**長尾 道子** (ながお みちこ)

食農わくわくねっとわーく北海道事務局長  
1971年生まれ。北海道長沼町出身。'92年藤女子短期大学卒業後、ホクレン農業協同組合連合会へ入会。'01年江別製粉(株)入社。'02年に食農わくわくねっとわーく北海道事務局長に就任し、田舎の魅力伝達人、農村ライター&コーディネーターとして活躍中。その他にも、九州のムラ出版室北海道分室長、北海道スローフード&フェアトレード研究会幹事、大分グリーン・ツーリズム研究会顧問、NPO法人北海道グランドワークトラスト社員を兼任。



パネリスト

**干場 一正** (ほしば かずまさ)

(有)クレスガーデン代表取締役  
1937年生まれ。北海道深川市(納内町)出身。'97年、36年間勤務した(株)ラルズを退社し、長沼町へ移住。'99年に新規就農し、翌年にファームレストランを開業。北海道スローフード&フェアトレード研究会会員、長沼町グリーンネットワーク会員、遊来ランド(長沼町6区都市交流農業グループ)会員、長沼町まおいネットワーク広場メンバーなど、これまでの経験を活かし、町内における農業者グループに所属し活躍中。



パネリスト

**山川八重子** (やまかわ やえこ)  
こぶしの会代表

1946年生まれ。北海道浦臼町出身。'91年旭川農業2世紀塾(若手農業者の学習グループ)へ所属し、'93年旭川農村婦人大学設立に関わる。'95年農業体験の受け入れを行うなど都市と農村の交流活動に参加し、'97年北海道ふれあいファームへ登録。'99年には地域の仲間たちと農産加工業を立ち上げ産直活動を開始。'03年、農家の母さんの出前料理講座により地産地消運動を始め、'04年には地域おこしグループ「農家の母さん」を結成。食を通じての都市と農村の交流を推進している。

理解していく。作るものの幸せのなかでお互いに作り支える、買い支える、食べ支える意識で交流していくことが、豆腐や味噌の小さな加工所を続けるエネルギー。街中に住む80歳のおじいさんが散歩の途中、自分の田んぼで一緒におにぎりを食べたときに、「おれ、このおにぎりを食べていたら、母さんを思い出した」と涙を流されたことがあり、その感動が自分の財産。農村のなかにはそんな宝がたくさんある。

**干場** 長沼町で農業法人(有)クレスガーデンを経営。農地5haで野菜、花、ハーブ等を作っているが、ファームレストランが主。たまたま、スローフードの時代の流れと重なったが、地元の材料にこだわり、手軽な値段で供給するというポリシーで営業。自分で作れないこまごましたものは地域の直売所から手に入れるのが一番。地産地消で魅力を出すのは難しいが、そばとか、大豆とか、大量にとれるものでも簡単に、料理でき魅力あるメニューが開発できればと考えている。もてなし、接客がどうあるべきかが問われているが、それぞれのスタイルによって必ずしもプロ的、都会的なものは要求されない。大事なのは真心。問題があれば、お客さんはやがて見抜く。今、ファームレストランや直売所がブーム的になっていて、たくさん出てきているが、見直しをしなければいけないときが来る。長沼で営業しているが、冬が全く

暇になってしまう。北海道の観光も含めた大きな課題となっている。

**斉藤** 本当の良さは田舎にある。都市と空港に近い田舎づくりがわが町のモットー。そこから出発して、ハーブガーデンや優良田園住宅、農家レストラン、体験学習などを通じて農村の良さを知ってもらいたい。農家の人たちと都会の人たちがハーブを題材にして会話が生まれ、そこから交流が生まれる。おとなしかった農家の女性も講師に招かれることで、意識が生まれ、都会の良さも学ぶ。これが都市と農村の共生・対流。田舎暮らしをしたい人が増えているが、田舎の良さを崩してもらっては困る。不便なこともあるが、手間暇かけて田舎に住めるかどうか検討してもらうことが重要と思う。農家の立場を生かしたもてなしのころころというのは、きれいな言葉を使う必要はない。素朴にその土地の自然体をおつけ合うことを都会の人も望んでお越しになるのではないかな。

**長尾** 農村が好きで、おいしい空気を吸って、水を飲んで、食べ物を食べて、ゆっくり時を過ごして、すてきな人と会うことをライフワークにしている。食と農に関する事で何かわくわくする事をやろうとする仲間が集まり、緩やかなネットワークを作り、食農教育って何だろうといったことを楽しんでやっている。北海道に



コーディネーター

**渡辺 藤男** (わたなべ ふじお)  
北海道新聞社常務取締役  
1940年生まれ。岐阜県出身。'65年北海道新聞社入社。これまで論説委員、編成局政治部長などを歴任。'03年常務取締役に就任。論説委員時代から北海道農業ジャーナリストの会に加わり、例会や現地調査などで「北海道農業」の将来展望を語り合い、こめ解放問題では政府に慎重な対応を求める論陣を張り、豊かな北海道農業確立を訴える。スローフード&フェアトレード研究会メンバー、北海道田園委員会委員。

熊本の子供がやってきた時に、でんぶんの塊の「生粉」を炭火で焼いてしょう油をかけて食べさせたところ、「こんなにうまいものを食べたことがない」と言って、お代わりをしたが、地元のおじさんが「こんなもの、うまいのか」と何度も聞いていたのが印象に残っている。九州では家庭の美味しいものが商売になっており、非常

にこなれている。自分のことを待っていてくれるというのが最大のおもてなし。いろいろな人たちとの出会いから、農村を回るようになったが、都市の農村の接着剤として、きちんとした職業として、欲しい人に欲しい情報をきちんと発信していきたい。

**渡辺** 北海道ではグリーンツーリズムが大変盛んになって、都市の方と農家の方の往来が増えている。北海道新聞のデータベースでグリーンツーリズムを検索すると104件の原稿が出ており、ここ1、2年で大変増えている。体験農場も5年前に比べると3倍に、ファームイン、農家レストランも倍増している。北海道の自然は一流だが、もてなしは三流四流といわれる方もいるが、本当のもてなしとは何であろうか。山川さんからは「農家っていいな。おにぎり食べて、自然の力を感じた」。干場さんからは「長沼で健康になった。やはり自然は健康に良い」。長尾さんからは「待っている人がいるから、そこに行くんだ」。斉藤さんからは「ルネッサンスの田舎づくり、田舎にステータスがあってよい」などと、含蓄のある言葉をいただいた。私からは、「交流は、人も町も心も美しくする」ということを付け加えたい。

## 「都市と農山漁村の共生・対流」 ～北海道宣言～



最後に壇上において、中野一成氏（北海道ツーリズム協会理事長）を中心とした有志により、北海道における都市と農山漁村の共生・対流の取り組みを進めることについて宣言がなされた。

## 「手づくり交流会」 ～お母さんたちの美味しい味～

シンポジウム終了後に、都市と農山漁村交流実行委員会の主催で交流会が開かれた。元気な農村女性グループや地域の方々が、旬の北海道産食材を持ち寄り、素朴で美味しい手づくりの料理を持ち寄っていただき、約200名の参加者の方々が料理を囲みながら新たな出会いや交流を深める機会となった。

